

### 遺跡の性格

皆見遺跡・カワラケ田遺跡は一連の遺跡であり、最も遺構の数が多き時期は六世紀から八世紀にかけて、つまり古墳時代後期から奈良時代にかけてである。この時期の主な遺構は竪穴住居跡と掘立柱建物跡であるが、時期的には前者が六世紀後半から七世紀前半、後者が一部重複しながら八世紀前半まで継続している。このことは、「この集落が従来の農業基盤型の集落から、豊前国府建設と軌を一にした『和名抄』所載の『皆見郷』へと変貌していったことを如実に物語る」とも考察される。これは本遺跡の出土遺物の中に、硯や製塩土器があることからもうなずける。大宰府から豊前国府を経て宇佐八幡宮に向かう官道は本遺跡のわずか二〇〇メートル南を北西から南東に走っており、本遺跡から豊前国府政庁までは約一・三キロメートルの距離にある。更に、本遺跡の南東約三〇〇メートルの八ツ重遺跡からは平安時代初期の井戸などが発見されている。このことから、この一帯は本遺跡や源左工門屋敷遺跡の集落や徳永川ノ上遺跡の古墳群が示すように、古墳時代後期（六世紀）以来大規模な集落が展開していたが、八世紀代に入って祓川を挟んだ隣接地に豊前国府が建設されるとともに、倉庫や廂付きの掘立柱建物が建設され、国府関連集落としての性格が付与され、更なる発展を遂げた。その結果として、平安時代に入っても継続して集落が営まれ、『和名抄』に「皆見郷」の名をとどめることとなったのであろう。ただし、本遺跡は皆見郷の前身の一部であり、その最盛期の集落本体はいまだ土中に埋もれたままである。

### 三 二月谷祭祀遺跡

当遺跡は、今川中流右岸の丘陵斜面に位置するが、この付近は細く険しい小丘陵が南東から北西方向に数

条延びている。遺跡は標高約五〇メートルの丘陵斜面にあり、眼下に犀川盆地や今川を見下ろすことができる。

当遺跡が所在する豊津台地南西部の一带は、南部の台ヶ原地区に比べ遺跡は希薄である。ただし、北方約一・一・五キロメートルの高崎地区や彦徳地区の丘陵部には、古墳時代の大規模な墓地在広がっている。

#### 遺跡の概要

当遺跡は昭和四十年の梅林造成工事中に発見されたもので、具体的な遺構は確認されていない。遺物は南北約一〇〇メートル、東西約五〇メートルの斜面の包含層から、祭祀に使用された手づくねによる土師器の小型壺や土製勾玉のほかに、鉄鎌・鍬・大刀・刀子などが出土している。

#### 四 居屋敷遺跡

居屋敷遺跡は、祓川中流域右岸の丘陵突端部に位置する。行政地区では、町の東北端部大字徳永地区に属し、西は祓川を境に田中、北・東は行橋市、南は皆見に接する農業地域である。地区内は県道節丸・新田原停車場線が南北に貫通している。また、徳永集落北端に五社神社、西部に成就山浄土宗果願寺がある。この果願寺は椎田道路路線内にまともにはいなかったため、新たに徳永地区内に移転している。

国道一〇号バイパス建設に伴う事前の試掘調査では、祓川の河岸段丘に沿って多くの遺跡が発見され、発掘調査が実施された。行橋市の辻垣地区では、辻垣長通・畠田・ヲサマル遺跡などで弥生終末から古墳時代初頭にかけての生活遺構が、この徳永地区では、鋤先・川の上遺跡などで弥生時代集落が見られ、古式古墳、後期古墳や横穴墓の群集が目を見ている。また、最古級の初期須恵器を焼いた窯がこの居屋敷遺跡の中から検出されたことも注目された。